

## 本の定価と消費税

またまた拙著『公共事業と財政』のことで恐縮だが、この本の定価は「本体1714円+税」である。本体価格に5%の消費税(正確には国税としての消費税4%と地方消費税1%)を加えると1800円になる。この種の本としては値打ちだと言われている。多くの人に読んでもらいたい、多くの人が購入してくれることを期待して、この価格をつけた。期待通りに売れているのか、気になるところだ。

なぜ本体を1714円という中途半端な価格にしたのか。「イナイヨ」と合わせたわけではなく、きりのよい1800円に定価をしたかった。この本を本屋で購入する際に、200円のおつりにしたかったからである。でも最近の傾向は、きりのよいのは本体の方が圧倒的に多い。

ところで4月8日付の毎日新聞の出版ウォッチングに、この表題のように「本の定価と消費税」という記事が載っていた。これによると89年の消費税導入時、出版業界は定価表示をめぐる揺れ動き、結局「内税」方式を採用したが、定価表示の変更のため多額の出費を強いられた。97年の消費税率の引き上げの際、書籍は現在のように「外税表示=本体価格+税」、雑誌は「内税表示」となった。その価格表示について消費税を含めた総額表示(内税表示)を義務づける法案が可決されたという。1年間の経過期間を経て、来年4月から実施される。この記事を書いた「出版メディアパル」編集長の下村昭夫氏は、消費税率の引き上げを視野に入れての痛税感を和らげる「姑息な手法」とし、改革の「2文字」にだまされるのは、もうこれくらいにしたいと述べている。

講義で消費税の話をする時、意外な「反応」が返ってくる。消費税の仕組みや問題点が、ほとんど理解されていない。これは消費税に限られるわけではないが。消費税の導入時や増税時には、多くの報道もなされたが、今ではほとんど話題にもされない。消費税導入から14年余り経ち、学生だけでなく国民の多くが慣れっこになってしまった。消費税導入サイドの思惑通りに推移している。でも「益税」という言葉を初めて聞いた学生は、消費税の生まれながらの問題点に興味をいだく。税と思った納めたものが、「利益」となってしまう不合理に納得できなくなる。

(4月27日記)